

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Sharing and Distribution of Bowhead Whale Meat among the Inupiat in Barrow, Alaska, USA

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003868

米国アラスカ州バロー村のイヌピアットによる ホッキョククジラ肉の分配と流通について

岸 上 伸 啓*

Sharing and Distribution of Bowhead Whale Meat
among the Inupiat in Barrow, Alaska, USA

Nobuhiro Kishigami

米国アラスカ州バローにおけるイヌピアットによるクジラの分配は、規則に基づく分配と自主的な分配に大別することができる。これら2種類の分配は、協働狩猟による成果である、文化的価値の高い食料をコミュニティ全体にいきわたらせるための社会的なしかけになっている。また、これらの2種類の分配の実践は、世界観の再生産や、さまざまなレベルでのアイデンティティと社会関係の再生産という効果以外に、文化的価値の高い食料の獲得手段やコミュニティの福祉 (wellfare) への貢献、個人や世帯レベルでの食料の消費量の平準化などさまざまな機能や効果がある。さらに、これら2種類の分配を通してキャプテンやその乗組員 (ハンター) は社会的名声や政治的影響力を得ることができる。筆者は、これらの複数の機能や効果のためにバロー村のイヌピアットの間では2種類の分配が存続していると考え、現代のイヌピアット社会における捕鯨や獲物の分配の実践は、個人的な利潤追求のためではなく、彼らにとって価値のある資源をコミュニティのために追い求め、コミュニティ全体で分かち合うことであり、それ自体が目的と化している。そしてその結果は、コミュニティ全体の福利 (well-being) に貢献している。

Among the Inupiat of Barrow, Alaska, there are two kinds of sharing practice surrounding whale meat and *maktak* (whale skin with blubber): formal sharing by rule and voluntary. Both are social devices relating to the culturally highly valued food which must be distributed to the whole community. Furthermore, these sharing practices have multi-dimensional functions

*国立民族学博物館先端人類科学研究部

Key Words : sharing, distribution, whale meat, Inupiat, Alaska, Aboriginal Subsistence Whaling
キーワード : 分配, 流通, 鯨肉, イヌピアット, アラスカ, 先住民生存捕鯨

including an efficient distribution device to the whole community, a contribution to community welfare, and a leveling mechanism for the consumption of whale products at the individual or household level, in addition to reproduction functions of the Inupiat worldview, identities at several levels, and social relationships. Also, through these two kinds of sharing practice, whaling captains and their crews attain social prestige and political influence. Finally, this author argues that for the Inupiat, whale hunting and sharing are not individual profit-seeking practices but an important social means for seeking and sharing culturally highly-valued resources such as whale products community-wide. Whaling and the sharing of its products seem to be an important aim, the results of which contribute to community well-being.

1 はじめに	4.2 祝祭での分配
2 バロー村のイヌピアットによる捕鯨	4.3 クジラの肉や脂皮の村内での分配
3 バロー村におけるイヌピアットのクジラの解体と分配——通時的变化と共時的変異	4.4 クジラの肉や脂皮の村外への分配と交換
3.1 バロー村の捕鯨とクジラの標準的分配	4.5 クジラの肉や脂皮などの販売や交換
3.2 バロー村におけるクジラの分配の共時的変異	5 分配量と捕鯨グループ内での分配
3.3 分配の通時的な変化——2世代間比較	6 分配や分与について
4 ホッキョククジラの第2次分配や第3次分配	6.1 クジラの分配の特徴
4.1 捕獲後のキャプテン宅での祝宴	6.2 クジラを規則に基づいて分配する理由
	6.3 クジラの分配を続ける理由と機能
	7 結語

1 はじめに

狩猟採集民社会の特徴のひとつは、食物分配（food sharing）の実践である¹⁾。イヌピアットのような狩猟採集民は、グローバル化の影響を受けながら大きな社会経済変化を体験してきたが、頻度や形態に変化がみられるものの、食物分配を続けている。この100年あまりの間に市場経済と新技術が浸透したことによって食料供給が安定して

きたにもかかわらず、なぜ彼らは食物分配を行うのか、続けるのか、どのように変化させてきたか、などを解明することは重要な研究課題である。

筆者は、1984年よりカナダ国ケベック州アクリヴィク村を中心にイヌイットの食物分配やハンター・サポート・プログラムによる食料の提供について調査を行ってきた。その結果、イヌイットの食物分配の中心的な形態は、交換ではなく、分与や再分配であること、さらに食物分配の実践は、動物と人間の関係や拡大家族関係、共同生産、場所、ハンターの社会的名声などさまざまな文化・社会的側面と相関関係にあることを指摘した（岸上 1998, 2007; Kishigami 2000, 2004）。

2006年からは、大型獣の分配を研究するためにアラスカ州バロー村のイヌピアット（Inupiat）²⁾によるホッキョククジラ猟やホッキョククジラの分配・流通に関する調査を開始した。ホッキョククジラ（英名 Bowhead whale, 学術名 *Balaena mysticetus*）は、成獣では体長が約 15メートル、体重が約 50 トンになるヒゲクジラの一つである。

バローのハンターは約 10メートル前後の小型のクジラを好んで捕獲するが、それでも 1頭は約 2,200 キログラムの肉と約 1,500 キログラムの脂皮などの食料を村にもたらすことになる。これらの産物は、規則に従って分配された後、第 2次、第 3次分配が行われる。

ボーデンホーンのホッキョククジラの分配に関する研究やデールやグレバーンによるシロイルカの分配に関する研究は、クジラのような大型動物の捕獲後の第 1次分配が、小型動物の分配とは異なり、規則に従って行われていることを指摘している（Bodenhorn 2000: 28, 35–36; Dahl 2000: 175–178; Graburn 1969: 68–70）。大型獣の分配は、イヌイットの間で観察されるアザラシ肉やカリブー肉の分配とは、異なる論理で実施されているように思える（cf. Hovelsrud-Broda 2000; Wenzel 2000; Kishigami 2000）。また、大型獣の規則に沿った分配の理由については共同作業に由来する分配説や誇示説などがあるが、進化生態学的な研究では、後者の説については否定的である（Alvard 2002; Alvard and Nolin 2002）。

本論の目的は、アラスカ州バロー村のイヌピアットによるホッキョククジラ（以下、クジラと略称）の分配の現状について報告し、その分配の特徴や効果について論じることである。

2 バロー村のイヌピアットによる捕鯨

現在のアラスカ先住民の捕鯨は、国際捕鯨委員会（IWC）が管理する先住民生存捕

鯨 (Aboriginal Subsistence Whaling)³⁾ のカテゴリーに入る⁴⁾。先住民生存捕鯨は、歴史的、栄養学的、文化的な必要性から IWC によって承認されている捕鯨の一タイプで、「原住民による地域的消費を目的とした捕鯨であり、古くからの伝統的な捕鯨やクジラ利用への依存が見られ、地域、家庭、社会、文化的に強いつながりをもつ、原住民・先住民・土着の人々により、またはそれらの人々に代わって行なう捕鯨」(Gambell 1993: 104, 翻訳はフリーマンほか 1989: 190) と定義されている。北極海地域でのホッキョククジラの捕獲制限枠は IWC において、1978 年から 1997 年まで 1 年間、2 年間、3 年間、4 年間と狩猟期が拡大される方向で設定され、1998 年以降は 5 年ごとに検討されるようになった。2008 年から 2012 年の期間中、280 頭の捕獲が承認されている。このうちの 25 頭 (1 年あたり 5 頭) はロシアの先住民に移譲しているため、アラスカのユピートとイヌピアットは 255 頭 (1 年あたり 51 頭) まで捕獲してよいことになっている。

現在、アラスカ州でクジラ猟を行なっているのは、イヌピアットとユピートの人々である。前者の村には、リトル・ダイオミード、ウェールズ、キヴァリナ、ポイント・ホープ、ポイント・レイ、ウエイナライト、パロー、ヌイックスト、カクトヴィクがある。後者の村には、セント・ローレンス島のガンベルとサヴォーンガがある (地



地図1 アラスカの捕鯨村の地図

図1)。現在のアラスカ先住民はクジラをおもに食料資源として利用している。また、クジラの髭や骨を工芸品の素材として利用することもあるが、きわめてマイナーな利用の仕方である⁵⁾。

筆者の調査地であるバロー村は、北緯 71 度 29 分、西経 156 度 79 分に位置し、チュクチ海に面するアメリカ合衆国最北端の村である。バロー村のイヌピアットは、村の近海を春季と秋季に回遊するクジラを捕獲する。春季の猟期は 4 月下旬から 5 月下旬にかけて、秋季の猟期は 9 月末から 10 月中旬にかけてである。現在のバロー村には約 55 人の捕鯨キャプテンと 300 人以上の捕鯨ボートの乗組員（ハンター）が存在している。

バロー村では、2005 年に 29 頭（春季 16 頭、秋季 13 頭）、2006 年に 22 頭（春季 3 頭、秋季 19 頭）、2007 年に 20 頭（春季 13 頭、秋季 7 頭）、2008 年に 21 頭（春季 9 頭、秋季 12 頭）、2009 年に 19 頭（春季 4 頭 [うち 1 頭は陸揚げできず]、秋季 15 頭）、2010 年に 22 頭（春季 14 頭、秋季 8 頭）のクジラが捕獲されている（Suydam et al. 2006; 2007; 2008; 2009; 2010; 2011）。1 年あたりの平均捕獲頭数は約 22 頭である。また、その体長の平均は約 10 ～ 11 メートルである⁶⁾。

アラスカ先住民などの先住民生存捕鯨は、特定の条件を満たすことで国際捕鯨委員会によって認められている。そのひとつが、捕鯨が伝統的であること、言い換えれば、現在でも生業であり、原則として商業的でないことである（岩崎 2011: 213–214; 浜口 2002: 23–26）。このため、アラスカのイヌピアットやユピートは、捕獲に成功したクジラの肉や脂皮を売買していない。これは、捕鯨活動が現金収入源にならないことを意味している。現在のイヌピアットの捕鯨は、キャプテン夫妻や彼らの家族の賃金収入や、先住民団体や石油会社からの配当金などを貯めて、自らが調達した資金を投入して活動を行っている⁷⁾。バロー村の場合、1 つの捕鯨グループが春季捕鯨を行うためには 1 シーズンあたり約 1 万ドルから約 3 万ドル、秋季捕鯨を行うためには約 5 千ドルから約 1 万ドルの経費がかかる。ボートや船外機など捕鯨に必要な装備を更新する時には、5 万ドルを越す経費がかかる（岸上 2009a: 515 の表 5 を参照）。この状況は、現在のイヌピアットの捕鯨活動を理解するための前提である⁸⁾。

3 バロー村におけるイヌピアットのクジラの解体と分配——通時的変化と共時的変異

イヌピアットによるクジラの解体の方法およびその分配については、ポイント・

ホープ村を中心に記録が残されている（蒲生 1964: 16–17; Foote 1992; Rainey 1947; Worl 1980: 317–320; VanStone 1962: 48–52）。また、1800 年ごろのウェールズ地域における解体と分配については、バーチ（Burch 2006: 160–165）による記述がある。さらにジョージは、バロー村における 1970 年代後半におけるクジラの解体と分配について報告している（George 1981: 789–803）。これらの記述を比較すると、同じ村でも通時的にみると分配の方法が変化してきていることやバロー村とポイント・ホープ村など村ごとに分配の方法が異なっていることがわかる。

本節では、バロー村におけるイヌピアットのクジラの解体後の第 1 次分配について、現在、標準的とされている分配の規則を提示した後、通時的な変化と共時的な変異を示す。ここで提示する標準的な分配規則は、バロー捕鯨キャプテン協会が学校教育用としてノース・スロープ郡教育委員会に提出し、副読本の中で記述されているものである（North Slope Borough School District 2002）。

筆者は 2006 年 9 月より 2011 年 12 月末までにアラスカ州バロー村で 11 回の短期の現地調査を実施した。本論文で使用するデータは、おもに第 6 次調査（2010 年 2 月 24 日～3 月 12 日）、第 7 次調査（2010 年 4 月 29 日～5 月 9 日）、第 8 次調査（2010 年 8 月 17 日～9 月 3 日）、第 9 次調査（2011 年 1 月 12 日～1 月 24 日）および第 10 次調査（2011 年 6 月 15 日～6 月 28 日）において、インタビューおよび参与観察によって収集したことをお断りしておきたい。

3.1 バロー村の捕鯨とクジラの標準的分配

捕獲されたクジラは、特定の規則に沿って解体され、分配される。この解体とそれに伴う分配は、村によってやり方が異なるが、同じ村の中でもキャプテンによって多少の差異が認められる。村落間での差異の報告と分析については、別稿に譲るとして、ここではバロー村において現在、もっとも一般的だと考えられる規則を紹介する（図 1 を参照）。

(1) *Tavsi* (タヴシ)：性器の部分から後方に幅約 30 センチの部分の肉と脂皮（脂肪つき皮部）は、半分が捕獲に成功した捕鯨グループに、残りの半分はキャプテン宅での祝宴で料理され、村人に振舞われる。

(2) *Uati* (オーティ)：*Tavsi* の部分から尾びれまでの間の部分は、キャプテンの地下貯蔵庫で保管され、ナルカタック祭や感謝祭、クリスマスの時の祝宴に提供される。

(3) *Itigruk* (イティガルク)：*Uati* と 2 枚の尾ひれとの間の部分は、キャプテンの地下貯蔵庫で保管され、ナルカタック祭の祝宴に供される。

(4) *Aqikkaak* (アッキッカーク) : 2枚の尾びれは、キャプテンの地下貯蔵庫で保管され、ナルカタック祭や感謝祭、クリスマスの時の祝宴に提供される。

(5) *Umiat Ningingat* (ウミアット・ニンギンガット) : *Tavsi* から口先にかけての髭とあご、2枚の胸びれの部分を除いた部位は、クジラの解体を手伝ったほかの捕鯨グループに提供される。ただし、各季節の最初に捕獲されたクジラのこの部位は、バロー村で登録しているすべての捕鯨グループに平等に分配される。また、秋季捕鯨の場合には、海岸から解体場までクジラを運搬するブルドーザーの操縦士にも1シェア (share)⁹⁾ が与えられる。

(6) *Suqqaich* (サッカイチ) : 髭の半分は捕獲した捕鯨グループに、残りの半分はクジラを曳航するのを助けた捕鯨グループに提供される。

(7) *Sakiq* (サキク) : 口から顎にかけての部位の半分は、捕鯨に成功した捕鯨グループのキャプテンに、残りの半分はクジラの曳航を助けた捕鯨グループの間で平等に分配される¹⁰⁾。

(8) *Taliguq* (タリグク) : 一方の胸びれは鉾の打ち手 (ハープナー) に、もう一方の胸びれは解体場所にいるすべての捕鯨グループに与えられる。

(9) *Utchik* (ウチク) : 舌の半分は解体に従事しているすべての捕鯨グループに与えられ、舌の4分の1はキャプテン宅での祝宴で、そして残りの4分の1はナルカタック祭の祝宴で村人に振舞われる。

(10) *Uumman* (ウーマン、心臓) や *Ingaluaq* (インガルアック、小腸)、*Taqtu* (タックトゥ、腎臓) : 半分はキャプテン宅での祝宴で、残りの半分は、キャプテンの地下

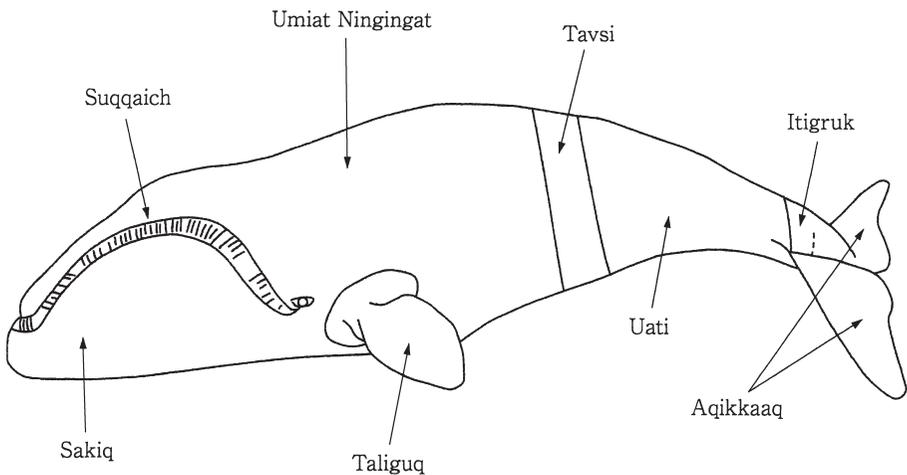


図1 ホッキョククジラの分配部位の名称 (North Slope Borough School District 2002 より)

貯蔵庫で保管され、ナルカタック祭で振舞われる。

解体と上記の分配が終了すると、キャプテンが号令を出す。この号令後は、だれでも残った肉や脂肪を自由に取っていくことが許される。この分配は、「ピラニアック」(*pilaniaq*) と呼ばれる。

このように捕獲されたクジラの肉や脂皮を、捕獲に成功した捕鯨グループが独占的に所有するのではなく、クジラの解体や曳航を助けた捕鯨グループや他の人々に規則に従って分配される仕組みになっている。

3.2 バロー村におけるクジラの分配の共時的変異

ここでは、若いキャプテン (40 歳代半ば) 2 名と高年のキャプテン (60 歳代前半) の分配の方法を、標準的な分配と比較しながら紹介する。

事例 1 H. A. の場合 (2010 年 8 月 22 日インタビュー)

H. A. は、40 歳代半ばの若いキャプテンで、キャプテン歴は 5 年程度である。現在、キャプテンの修行中でもある。H. A. をキャプテンとする捕鯨グループは、2010 年 5 月にクジラを仕留めた。その際のクジラの分配方法は次の通りである。

(1) *Tavsi* : 標準的な分配と同じ。キャプテン H. A. は、半分を自らの捕鯨グループの成員とキャプテン宅の祝宴の準備や後片付けに従事した人々、あわせて 30 人に平等に分配した。

(2) *Uati* : 標準的な分配と同じ。ほぼ半分をナルカタック祭用、4 分の 1 を感謝祭用に、4 分の 1 をクリスマス用に使用する。

(3) *Itigruk* : (2) の *Uati* の一部として、(2) と同様に使用される。

(4) *Aqikkaak* : (2) の *Uati* の一部として、(2) と同様に使用される。

(5) *Umiat Ningingat* : 解体作業に参加した自身の捕鯨グループとその解体を助けたほかの捕鯨グループや助っ人すべてに提供される。たとえば、自身の捕鯨グループを含めた捕鯨グループが 15 あり、さらに 5 人の個人が解体作業に参加した場合にはその 5 人を 1 グループとみなし、16 等分に分ける。各捕鯨グループは、16 分の 1 の部位をもらい、それを各捕鯨グループのキャプテンの裁量によってグループ内で再分配する。キャプテン H. A. の場合は、自身 (1 人)、乗組員 4 人、燃料の提供者 2 人、狩猟道具 (ダーティング・ガン) を貸してくれた人 1 名の 8 シェアー (8 等分) に分配した。

基本的には、標準タイプと同じだが、自身の捕鯨グループも 1 シェアーをもらう点

が標準と異なっている。

(6) *Suqqaich* : 標準的な分配と同じ。

(7) *Sakiq* : 標準的な分配と同じ。

(8) *Taliġuq* : 一方の胸びれを銚の打ち手 (ハーブナー) に与える点は標準的な分配と同じだが、もう一方は解体に参加した人に与えるのではなく、キャプテンのものとなり、熟成発酵させ、ナルカタック祭で提供する。

(9) *Utchik* : H. A. の場合、舌の半分を解体に従事しているすべての捕鯨グループに与えることはなく、舌の半分はキャプテン宅での祝宴で、そして残りの半分はナルカタック祭の祝宴で振舞われる。

(10) *Uumman* (心臓) や *Ingaluaq* (小腸), *Taqtu* (腎臓) : 標準的な配分と同じ。

解体と上記の分配が終了すると、キャプテンが号令を出し、だれでも残った肉や脂肪を自由にとっていくことが許される点も標準的な分配と同じであった。

以上のように、(5) や (8), (9) において標準タイプとは少し異なる分配が行われていた。これはキャプテンの裁量による決定を反映した結果であった。

事例2 G. B. の場合 (2010年8月26日インタビュー)

G. B. は、父親の逝去に伴い、村の中でも数本の指に入る捕獲率の高い捕鯨グループを継承し、キャプテンとなった。年齢は40歳代後半であるが、経験が豊かなハンターである。2010年5月5日にクジラを捕獲している。その際の分配の仕方は以下の通りである。

(1) *Tavsi* : 標準的な分配と同じ。ただし、キャプテンはボートを所有しているので1シェア取り分が多い。

(2) *Uati* : 標準的な分配と同じ。

(3) *Itiġruk* : 標準的な分配と同じ。

(4) *Aqikkaak* : *Uati* の一部とみなされ、(2) と同じように分配される。

(5) *Umiat Ningingat* : 解体に参加したすべての捕鯨グループと助っ人のグループに平等に分配される。従って、標準タイプとは異なり、捕獲した捕鯨グループも解体に参加するので、1シェアを得る。

(6) *Suqqaich* : 髭の半分は捕獲に成功した捕鯨グループに与えられ、残りの半分はクジラの曳航に参加した捕鯨グループに等しく分配される。後者では、捕獲した捕鯨グループが曳航に参加しているので、1シェアを得ることができる。

(7) *Sakiq* : 口から顎にかけての部位の一方は、捕鯨に成功した捕鯨グループに与

えられ、残りの半分はクジラの曳航に参加した捕鯨グループに等しく分配される。後者では、捕獲した捕鯨グループが曳航に参加している場合には、1シェアを得ることができる。

(8) *Taliġuq* : 標準的な分配と同じ。

(9) *Utchik* : 舌の半分は解体に従事しているすべての捕鯨グループに与えられ、残りの半分は3等分され、3分の1が捕獲した捕鯨グループの構成員に、3分の1がキャプテン宅の祝宴に、3分の1がナルカタック祭に提供される。

(10) *Uumman* (心臓) や *Ingaluaq* (小腸), *Taqtu* (腎臓) : 標準的な分配と同様にキャプテン宅での祝宴とナルカタック祭で振舞われるが、分量の比率はキャプテンが決める。G. B. の場合は、ナルカタック祭よりもキャプテン宅の祝宴の方により多くの分量を使用する。

(11) 鼓膜 : 一方はキャプテンが、もう一方は鉦の打ち手 (ハープナー) がもらう¹¹⁾。

解体と上記の分配が終了すると、キャプテンが号令を出し、だれでも残った肉や脂肪を自由に取っていくことが許される点は同じである。

この事例では、(1), (4), (5), (6), (7), (9), (11) では、標準と少し異なり、捕獲に成功した捕鯨グループが解体や曳航に参加した場合には、1シェアを得るとされている。また、キャプテンはボートの所有者であるので、取り分が乗組員よりも1シェア多い。祝宴に提供する各部位の分量は、キャプテンが決定する。

事例3 J. L. の場合 (2010年3月7日インタビュー)

J. L. は60歳代のキャプテンで、捕鯨について豊富な経験を有している。キャプテンは、父親から受け継いだ。J. L. をキャプテンとする捕鯨グループは、2009年5月23日にクジラを捕獲した。その際の分配の仕方は次の通りである。

(1) *Tavsi* : J. L. はすべてをキャプテン宅での祝宴用に料理し、振舞う。

(2) *Uati* : 標準的な分配と同じ。

(3) *Itigruk* : 標準的な分配と同じ。

(4) *Aqikkaak* : 標準的な分配と同じ。

(5) *Umiat Ningingat* : 基本的には標準と同じだが、解体に参加した自分の捕鯨グループも1シェアをもらう点が、異なる。

(6) *Suqqaich* : 髭の半分はキャプテンのものとなり、自分の乗組員に分配するか、売ったりする。残りの半分は自身の捕鯨グループを含めクジラの曳航に参加した捕鯨

グループに平等に分配される。

(7) *Sakiq* : 標準的な分配と同じ。J. L. の場合は、祝宴に提供する。

(8) *Taliḡuq* : 標準的な分配と同じ。

(9) *Utchik* : 標準的な分配と同じ。

(10) *Uumman* (心臓) や *Inḡaluaq* (小腸), *Taqtu* (腎臓) : 標準的な分配と同じ。

解体と上記の分配が終了すると、キャプテンが号令を出し、だれでも残った肉や脂肪を自由にとっていくことが許される点は標準的な分配と同じである。

この事例の場合、(1)、(5)、(6)、(7) が標準タイプと異なる。キャプテンや彼の乗組員の取り分は、(5) や (6) となる。

以上の3例のように、キャプテンによって分配のやり方に小さな差異が認められる。分配については、キャプテンの裁量が反映されており、必ずしも標準タイプと一致するわけでないことがわかる。しかし、キャプテンは分配をある程度裁量することができるが、分配のやり方の大枠は規則によって決まっているために、キャプテンや彼の捕鯨グループに食料をもたらすより、村全体や他の捕鯨グループに食料を提供していることがわかる。また、解体や曳航に関する分配では、助けた捕鯨グループや個人だけでなく、捕獲に成功した捕鯨グループがそれらに参加した場合には、1シェアを得る傾向が認められる。キャプテンが捕鯨に使用するボートを所有しているので、ボートに乗り込んだハンター(乗組員)の1人として1シェアとボート分の1シェアの計2シェアの分け前を受け取る場合がある。さらに、捕鯨グループ内に息子など直系の世帯家族成員が多い場合は、キャプテン世帯の取り分が多くなるが、非親族を多数含む捕鯨グループは、成員各自がより平等な分け前を得る傾向がある。特に、若いキャプテンは捕鯨グループ内でより平等に分配する傾向が認められる。

なお、実際の解体作業での分配においては、クジラの大きさなどによって分配量が異なる上に、キャプテンの裁量が大きくなることがあるが、分配が不公平にならないように、分配の監視役としてバロー捕鯨キャプテン婦人協会のメンバーが解体に立ち会い、肉や脂皮の分配作業について指示を出す場合が多い。

3.3 分配の通時的な変化—2世代間比較

事例2で紹介した現役キャプテンの父がキャプテンとして活躍していた1978年から1980年の間にクレグ・ジョージは、解体と分配について参与観察を行っている。ここでは、その事例を提示し、事例2と比較する(図2を参照)。

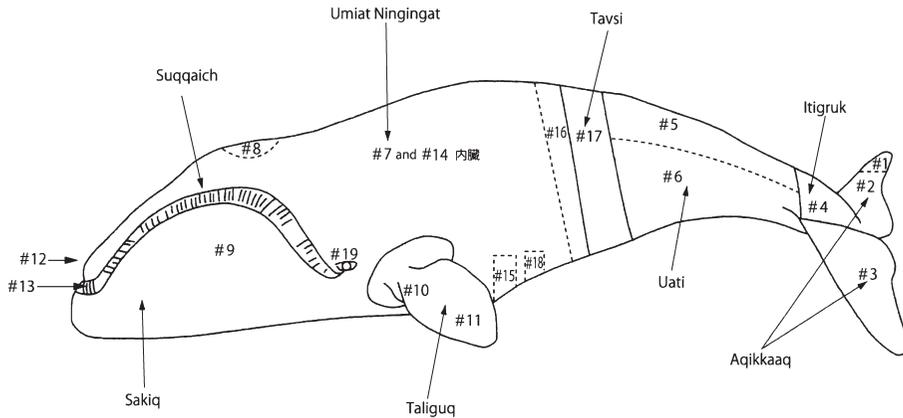


図2 ホッキョククジラの分配部位の名称 (George 1981: 791をもとに作成)

事例4 A. B. の場合 (1978年～1980年)

クレグ・ジョージの報告によると、クジラは解体された後、次のように分配されている (George 1981)。

(1) *Tavsi* : (図2の#17に対応) クジラの内臓とともにキャプテン宅での祝宴で、料理され、村人に振舞われる (George 1981: 795)。

(2) *Uati* : (図2の#5と#6に対応) #5は、ナルカタック祭で村人に提供される。#6は、ナルカタック祭、感謝祭、クリスマスで村人に提供される (George 1981: 792)。

(3) *Itigruk* : (図2の#4に対応) #4は、ナルカタック祭で村人に提供される (George 1981: 792)。

(4) *Aqikkaak* : (図2の#1, #2, #3に対応) #1は、美味しい部分であり、11月の感謝祭で村人に提供される。#2は、クリスマスで村人に提供される。#3は、ナルカタック祭で村人に提供される (George 1981: 790, 792)。

(5) *Umiat Ningingat* : (図2の#7に対応) 解体に従事した捕鯨グループの間で分配される。最初に捕獲されたクジラは、登録されているすべての捕鯨グループに平等に分配される。2頭目以降は、解体に従事した捕鯨グループにのみ分配される (George 1981: 792)。

(6) *Suqqaich* : (図2の#13に対応) 1隻以上のボートがクジラを曳航した場合には、髭の半分はキャプテンのものとなり、残りの半分は曳航に参加した他の捕鯨グループの間で平等に分配される (George 1981: 793)。

(7) *Sakiq* : (図2の#9に対応) 口から顎にかけての部位の半分は、捕鯨に成功した捕鯨グループのキャプテンに、残りの半分はクジラの解体を助けた捕鯨グループの

間で平等に分配される (George 1981: 793)。

(8) *Taliguq*: (図2の#10, #11に対応) 一方の胸びれは銛の打ち手 (ハープナー) に、もう一方の胸びれは解体場所にいるすべての捕鯨グループに与えられる (George 1981: 793)。

(9) *Utchik*: (図2の#12に対応) 舌は解体に従事しているすべての捕鯨グループに分配される (George 1981: 793)。

(10) *Uumman* (心臓) や *Ingaluaq* (小腸), *Taqtu* (腎臓): (図2の#14に対応) 半分はキャプテン宅での祝宴で、残りの半分は、キャプテンの地下貯蔵庫で保管され、ナルカタック祭で村人に振舞われる (George 1981: 793)。

(11) その他の部位の分配について

図2の#8: 潮を吹く部分の周りの部位は、クリスマスの時に村人に提供される (George 1981: 793)。

図2の#15: 50センチ×50センチ×40センチの脂皮の部分が調理され、解体場所で作業に従事している人々に振舞われる (George 1981: 793)。

図2の#16: この部位の脂皮は、クジラにショルダー・ガンを撃った他の捕鯨グループに与えられる。もしくは、希望によって脂皮ではなくショルダー・ガンの爆弾付きの銃弾が与えられる (George 1981: 794)。

図2の#18: この部位 (1辺30センチの立方体の脂皮および同じ大きさの肉) は、クジラを氷上に引きあげる時に用いる滑車装置の所有者兼操作者に与えられる (George 1981: 794)。

図2の#19: 鼓膜の部分は、キャプテンのものである (George 1981: 794)。

解体と上記の分配が終了し、キャプテンが号令を出すと女性やその他のだれでもが残った肉や脂肪を自由に取っていくことが許される (George 1981: 794)。

この分配の事例と息子の事例2を比較すると、分配や部位の使用については基本的には連続性が確認できるものの、全体としてみれば解体後の分配のやり方が簡略化される傾向にある。さらに *Tavsi* や *Uati* の部位の使用が大きく変化してきている。当事者自身は、知識や技術が親から子へと伝達され、継承されると考えているが、実際には親子間でも変化が起こっている点を強調しておきたい。さらに、分配に際してはキャプテンの裁量の範囲や分配のやり方は、近年、村内で標準化されつつあるように思われる。

本節では、バロー村のクジラの分配のやり方が、規則によって決められており、そ

の実際については共時的にも通時的にも多少の差異が認められることを確認した。

4 ホッキョククジラの第2次分配や第3次分配

クジラの解体直後の第1次分配の後、クジラの肉や脂皮は祝宴や日常的な分配、交換などを通して、バロー村内外のイヌピアットへと流通していく。ここでは、クジラの第2次分配や第3次分配について紹介する。

4.1 捕獲後のキャプテン宅での祝宴

捕獲・解体が終わった翌日には、クジラを捕獲したキャプテン宅で、祝宴が開催される。この祝宴は、「ニギプカイ」(*nigipkai*)と呼ばれるが、村人にクジラ料理などを提供する催しである。この時に料理され、振舞われるのは、*Tavsi*と呼ばれるベルト状の部位の肉と脂皮の半分、および舌や心臓、腎臓、小腸の約半分である。

捕鯨に成功したキャプテンの自宅の屋根の上には、彼の捕鯨グループの旗が立てられる。クジラの捕獲に成功したハンターとその妻たちは、キャプテンの自宅に集まり、祝宴の準備をする。彼らは、肉と脂皮、舌、心臓、腎臓、小腸を適切な大きさに切り、水で煮る。胸びれの部分は、生のまま脂身を付けた状態で小片に切り分ける。これらは宴会用と提供用に分けられる。後者の場合、1人1食分程度の肉や内臓がビニール袋に詰められる。また、マフィンの形をしたパンや揚げパン(ドーナツ)、果物の煮もの、コーヒーや紅茶を準備する。

準備が整うと、キャプテンは無線を利用して、キリスト教の神に捕獲成功の感謝の祈りをささげた後、これから祝宴を開始する旨と、村人にクジラの肉などを取りに来るようにと伝える。村人が、三々五々に集まってくると、キャプテンとその捕鯨グループの妻や娘たちは、やってきた村人に彼らの家族の員数を考慮しながら食べ物の入ったビニール袋を渡す。もらった村人は自宅に持って帰って食べるが、村の古老たちや親族はキャプテンの自宅の居間でクジラの肉や脂皮などを楽しんだ後、お土産に肉などをもらってかえる。

また、キャプテン宅にやって来ることができない古老や寡婦には、キャプテンらが、食べ物の入ったビニール袋を配達する。

来客に渡す食べ物がなくなると、キャプテンは無線を使って祝宴が終わったことを村人に告げ、屋根に立てていた捕鯨グループの旗を降ろす。

この祝宴を通して、多数の村人世帯に1食分のクジラ料理が提供されるとともに、

寡婦世帯や老人世帯には多めのクジラの肉や脂皮が提供される。

4.2 祝祭での分配

春季捕鯨の後、アプガウティとナルカタック祭と呼ばれる祝祭が開催され、その際にクジラ料理が村人に提供される。アプガウティの祝宴は、その年に捕鯨に成功した捕鯨グループが単独で5月中旬から6月上旬にかけて、ウミアック (*umiaq*, アザラシ皮製大型ボート) を陸揚げする日に開催する。一方、ナルカタック祭の祝宴は、単独もしくは複数の捕鯨グループが連携して6月中旬から下旬にかけて複数回、実施する (岸上 2011b)。

アプガウティを実施しないキャプテンもいるが、春季に捕獲されたクジラの数だけ開催されることが多い。アプガウティの料理は、ミキガックと呼ばれる鯨肉や脂皮、脂肪、血液などを混ぜ合わせ、発酵させた料理とカモ・スープ、ガン・スープが中心となり、パンや果物、紅茶、コーヒーが提供される。あるアプガウティでは、ポリバケツ 14 杯分のミキガック (266 リットル相当)、カモ・スープとガン・スープがそれぞれ鍋 20 杯ずつ、パンとエスキモー・ドーナツがそれぞれ 2,000 個ずつ、煮た果物がバケツ 10 杯分 (190 リットル相当)、紅茶約 53 リットル、コーヒー約 38 リットルが準備された。このアプガウティは大規模な方だが、アプガウティの祝宴で提供されるクジラ料理の量は、キャプテンの裁量で異なる。小規模な場合には 100 人程度であり、大規模な場合には 400 人以上の村人がこの祝宴に参加する。各参加者がもらえるのは、1 ないし 2 食分である (岸上 2011b)。

また、バロー村では、例年ならば、6月中旬から末にかけて3回以上のナルカタック祭が開催される¹²⁾。ナルカタック祭は、その年の春にクジラを仕留めたキャプテンたちが主催し、水揚げされたクジラの頭数が多い年には各回4、5回開催される。バローではナルカタック祭は各回1日で実施される。2008年6月30日には、2人のキャプテンが合同でナルカタック祭を開催した。正午にはカモ・スープやガン・スープ、パン、コーヒーや紅茶が振舞われた。午後3時にはミキガックが、そして午後6時には鯨肉や脂皮、ケーキ、果物、紅茶やコーヒーが提供された。キャプテンは、捕獲したクジラの *Uati* や *Itigaruk*、尾びれの部分の約3分の1を、さらに心臓や腎臓、小腸の半分をこの祝宴に提供する。この祭りには、1回につきのべ2,000人以上が参加するが、各自が入手できるのは、正午、午後3時、午後6時に1食ずつ程度である。ただし、大量の鯨肉や脂肪がある場合には、それらが等分され、各参加者におみやげとして分配される。この時には、トランポリンのようなブランケット・トス (*blanket*

toss)¹³⁾が行われるほか、イヌピアットの伝統的なダンスが披露される。

また、11月の感謝祭の時と12月のクリスマスの時には、それぞれ村の複数の教会で祝宴が開催されるが、その年に捕鯨に成功したキャプテンは、捕獲したクジラの *Uati* や *Itigaruk*、尾びれの部分の約3分の1をそれぞれの祝宴に提供する。村には5つ以上の異なる宗派のキリスト教会があるが、キャプテンはその中から、イヌピアットが所属している長老派教会やコーナーストーン教会、アッセンブリーズオブゴッド教会など3～5の教会に提供している。感謝祭やクリスマスの時に大量の冷凍鯨肉や脂皮がある場合には、それらは等分され、各参加者におみやげとして分配される。さらに、数年に1度開催される使者祭 (*kivgiq*, the messenger feast)¹⁴⁾では、キャプテンやハンターたちがクジラ料理を持ち寄り、他の村の人々を招待して開催される。

このような公の祝宴が1年あたりのべ20回以上開催され、クジラの肉や脂皮、内臓、ミキガックが村人に流通し、消費されているのである。

4.3 クジラの肉や脂皮の村内での分配

ひとつたびクジラの肉や脂皮が、各捕鯨グループの中でキャプテンやハンターらに分配されると、それらはさらに別の人々へと分配される。キャプテンやハンターは、自分の取り分の一部を同じ村に住む親兄弟姉妹やオジ・オバなどの拡大家族内のメンバーや義理の両親、友人などに分与するほか、食事を通して分配する¹⁵⁾。

キャプテンやハンターは、親族関係がなくても狩猟に従事できない老人や寡婦、生活に困っている世帯に自分の取り分の一部からクジラの肉や脂皮を贈与する¹⁶⁾。また、死者がでた家族に、肉や脂皮を贈与することがある。また、村内の工芸家の親族にクジラの髭を贈与することもある。

4.4 クジラの肉や脂皮の村外への分配と交換

キャプテンやハンターたちの中には、兄弟姉妹やイトコ、子供やオイ、メイ、友人が他村や他の州で生活している場合がある。彼らは電話や電子メールを利用して交信し、カクトヴィクやアッカスックなど近隣の村のみならず、ポイント・ホープ、コツビュー、アンカレッジやフェアバンクス、シアトルなどに住む家族や親族、友人にクジラの肉や脂皮、カリブー肉などの地元の産物を航空便や人に託して送っている。また、アンカレッジの病院に入院中の家族や親族にクジラの肉や脂皮を送ることがある。筆者が、確認できた贈与先は、ヌイックスット、アッカスック、ポイント・レイ、ポイント・ホープ、セラウィク、フェアバンクス、アンカレッジ、ノーム、アナクト

岸上 米国アラスカ州バロー村のイヌピアットによるホッキョククジラ肉の分配と流通について

ヴクパス、コツビュー、ノーヴィック、モンタナ州、ワシントン州、アリゾナ州、カリフォルニア州、ハワイ州であった。イヌピアットの人々が仕事や教育、婚姻などのために米国各地に移動していることがこのことからわかる。

一方、他の村に住む家族や親族が、各地でとれるキュウリウオ(smelt)やホワイトフィッシュ、シロイルカの肉や脂皮を送ってくれることも多い。たとえば、カクトヴィクに住むハンターが、12メートルのクジラを捕獲した際、バロー在住のイトコにポリバケツ1杯分の脂皮を、人を介して届けてきたことを筆者は目撃したこともある。

また、さまざまな先住民会議で出会った人々と約束し、地元の産物を交換することがある。たとえば、あるイヌピアットの男性は、アラスカ先住民会議で出会った他の民族出身者と約20キログラム相当のクジラの肉と脂皮を、干しザケと交換した。これまでに、次のような交換が確認できた。

表1 バロー村と村外との交換相手と交換物

相手の村・相手	送られてきたモノ	相手に送ったモノ
フーパーベイの知人（非イヌピアット）	ムースの肉	クジラの脂皮
コディアク島の知人（非イヌピアット）	サケとオヒョウ	クジラの脂皮
アラスカ内陸の知人（非イヌピアット）	カリブーの脂肪	クジラの肉、脂皮、鯨油
ウェインライトの知人（イヌピアット）	キュウリウオとシロイルカ	クジラの脂皮やカリブー肉、ホワイトフィッシュ、アゴヒゲアザラシ、セイウチ
ユーコン川の内陸先住民の知人（非イヌピアット）	サーモン・ストライプやムース・ストライプ	アザラシの脂油とクジラの脂皮
ベセルの知人（非イヌピアット）	サケやベリー類	クジラの脂皮やアザラシの脂油
アッカスツクの知人（イヌピアット）	子持ちのホワイトフィッシュ	クジラの脂皮
アンカレッジやフェアバンクスの友人（イヌピアット）	紅茶やコーヒー、小麦粉、手袋や浮き用ロープ	クジラの肉や脂皮

このように村外の人への分配や交換がさかんに行われている。

4.5 クジラの肉や脂皮などの販売や交換

クジラの肉など可食部位は、現金によって売買されることはなく、規則に基づく分

配や日常の自主的な分配によって村人へと流通していく。さらに村人は村外に住む家族や親族、友人にクジラの肉などを分与したり、他地域の産物と交換したりする。キャプテンは自らの資金を投入して捕鯨を行っており、彼らの捕鯨は基本的に商業目的ではない。

クジラ産物で売買の対象になる部位はクジラの髭であり、約30センチ当たり35米ドルで売り買いされることがある。しかし、キャプテンやハンターは、彼らの家族や親族、友人の工芸家にクジラの髭や骨を無償で贈呈することが多い。なお、村の工芸家はクジラの髭製や鯨骨製の工芸品を観光客などに販売している。

5 分配量と捕鯨グループ内での分配

バロー村のハンターは、全長が10メートル前後のクジラを好んで捕獲するが、ここでは既存のデータを利用して、1頭のクジラの各部位の分配を重量の観点から見てみる。

ジョージらは全長11メートル、総重量14,797キログラムのオスクジラの（骨などを除く）各部位の重量について、表2のように報告している（George, Philo, Carroll and Albert 1988）。なお、この全長11メートルのホッキョククジラは、イヌピアットが捕獲している平均的なクジラである。

この各部位の重量の割合は、ほかの大きさのホッキョククジラにもほぼ比例すると考えられている（George, Philo, Carroll and Albert 1988）。また、解体・分配の時の *Umat Ningingat*, *Tavsi*, *Uati* の部位の比率は、大雑把に分ければそれぞれ60パーセン

表2 体長11メートルのホッキョククジラの各部位の重量と割合

部位名称	重量	重量の割合
舌	893 キログラム	(6 %)
脂皮	6,601 キログラム	(44 %)
肉	2,428 キログラム	(16 %)
髭	595.5 キログラム	(4 %)
尾びれ	217.7 キログラム	(1.5%)
胸びれ	349.2 キログラム	(2.4%)
腎臓 (両方)	97.9 キログラム	(0.7%)
心臓	95.2 キログラム	(0.6%)
小腸	223.8 キログラム	(1.5%)

出典：George, Philo, Carroll and Albert (1988) より作成

* 脂皮の可食部分は4分の1か5分の1程度。

* 骨や血液、肺の重量は、この表から除外。

ト、10パーセント、30パーセントである（Brower Jr. and Hepa 1998: 38）。この比率に従い、肉と脂皮の重量を推定してみたい。なお、可食の脂皮部は20パーセントと仮定する。また、尾びれと胸びれの分配についてはここでは検討しないことにする。

2010年5月4日の狩猟では、全長8.4メートル、推定重量が11,300キログラムのメスのクジラが捕獲された（表3の6）。表2をもとに計算すると、肉は全体重の16パーセントに相当する約1,808キログラム、脂皮の可食部位は全体重の8.8パーセントに相当する約994キログラムである。解体に参加した捕鯨グループや個人に分配される *Umiat Ningingat* は、約1,085キログラムの肉と約596キログラムの脂皮である。たとえば、2010年5月4日の解体の場合には、総計15捕鯨グループ（各捕鯨グループが2ないし3名の助っ人を派遣）と4人が個人的に参加したので、4人を1捕鯨グループとみなし、この部位は16等分された。解体に参加した各捕鯨グループは、肉を約68キログラム、脂皮を約37キログラム得たことになる。これらは各捕鯨グループのキャプテンによって各メンバーに再分配される。

キャプテン宅の祝宴と捕獲した捕鯨グループの取り分となる *Tavsi* の部位は、それぞれ肉が約90キログラムと脂皮が約50キログラムである。キャプテン宅の祝宴には、肉と脂皮以外に、舌が約170キログラム、腎臓が約40キログラム、心臓が約34キログラム、小腸が約85キログラム、料理され、村人に提供される。

ナルカタック祭や感謝祭、クリスマスにコミュニティ全体に提供される *Uati* に相当する肉の総量は約542キログラムと脂皮約298キログラムである。これら3つの祭りにどのくらいの肉や脂皮を提供するかを決めるのはキャプテンであるが、それぞれほぼ50パーセント、25パーセント、25パーセントと仮定すると、ナルカタック祭には、クジラの肉が約271キログラム、脂皮が約149キログラム提供され、感謝祭とクリスマスにはそれぞれ約136キログラム、約75キログラムずつがコミュニティに提供される。さらに、ナルカタック祭の時には、舌が約170キログラム、腎臓が約40キログラム、心臓が約34キログラム、小腸が約85キログラム、提供されることになる。

2010年には、表3で示しているように22頭のクジラが水揚げされた。体長をもとに水揚げ総量を計算すると273,556キログラムとなる¹⁷⁾。これをもとに計算すれば、可食部分は肉が43,769キログラムで、脂皮が24,073キログラムである。そのうち、その年に村で開催される祝宴において、クジラの肉13,130キログラムあまりと脂皮7,222キログラムが村のイヌピアット全体を対象とした祝宴で消費もしくは分配されていることになる。

このように捕獲されたクジラのおお半は、解体に参加した他の捕鯨グループや個人、

コミュニティを対象とした祝宴に使用されている。捕鯨に成功した捕鯨グループ全体の取り分は、*Tavsi* の半分と *Umiat Ningingat* の 16 分の 1 の合計、すなわち、クジラの肉が 158 キログラムと脂皮 87 キログラムである。これらが、各キャプテンの裁量によって各グループ内で分配される。2010 年 5 月 4 日の場合（表 3 の 6）には、メンバー（キャプテン 1 名と乗組員 4 人）5 名と燃料を提供した人 2 名、ダーティング・ガンを貸してくれた人 1 名に等しく分配した。この場合、キャプテンと乗組員の取り分の間には差がなく、1 人当たり約 19.8 キログラムの肉と約 10.9 キログラムの脂皮

表 3 2010 年にバロー村で捕獲されたホッキョククジラの捕獲日、体長、性別

通し番号	捕獲した月日 (2010 年)	捕獲されたクジラの体長 (単位：メートル)	性別
春季捕鯨			
1	5 月 1 日	10.9	メス
2	5 月 3 日	8.3	メス
3	5 月 4 日	8.0	メス
4	5 月 4 日	8.7	オス
5	5 月 4 日	8.7	オス
6	5 月 4 日	8.4	メス
7	5 月 5 日	8.4	オス
8	5 月 5 日	7.3	オス
9	5 月 5 日	8.7	不詳
10	5 月 6 日	10.7	メス
11	5 月 7 日	7.5	オス
12	5 月 9 日	9.8	メス
13	5 月 12 日	13.1	メス
14	5 月 15 日	8.3	メス
1 ~ 14	春季平均体長	9.1	オス 5, メス 8, 不詳 1
秋季捕鯨			
15	10 月 7 日	12.3	メス
16	10 月 7 日	7.8	オス
17	10 月 7 日	10.8	オス
18	10 月 8 日	9.0	メス
19	10 月 8 日	10.9	メス
20	10 月 9 日	7.7	オス
21	10 月 9 日	11.2	オス
22	10 月 11 日	7.1	メス
15 ~ 22	秋季平均体長	9.6	オス 4, メス 4
1 ~ 22	通年平均体長	9.3	オス 9, メス 12, 不詳 1

出典：Suydam et al. (2011: 6)

となる。また、鉾の打ち手（ハーブナー）は一方の胸びれ（約 158 キログラム）を得る。このように見ると捕鯨に成功した捕鯨グループのメンバーが自由に処分できる量はそれほど多くないことがわかる。

ただし、他の捕鯨グループが捕鯨に成功した時に、捕鯨グループから助っ人を派遣し、解体作業を助けた場合には、*Umiat Ningingat* の部位から応分の肉や脂皮を得ることができる。ここで紹介したグループが 1 頭を捕獲し、それ以外に解体に 10 回参加した場合に入手できる肉や脂皮の総量を推定してみたい。表 3 が示す通り、2010 年に捕獲したクジラの平均体長は 9.3 メートルである。従って、1 頭当たりの総重量は 12,510 キログラムと推定できる。さらに、解体には 16 グループ相当が参加したと仮定すると、各グループは 1 回につき肉を約 75 キログラム、脂皮を約 41.3 キログラム入手できる。従って、年間 10 回、他の捕鯨グループの解体に参加したとすると、合計で 750 キログラムの肉と 413 キログラムの脂皮を獲得できる。これを上記の 8 名で分配すると 1 名あたり、肉が約 93.8 キログラム、脂皮が約 51.6 キログラムとなる。上記の捕鯨グループの場合、キャプテンや乗組員が平等に分配した場合には、1 人 1 年あたりそれぞれ合計で約 113.6 キログラムの肉と、62.5 キログラムの脂皮を入手することができる。これらの肉や脂皮は、各世帯が自由に消費したり分配したりすることができる。ひとつの捕鯨グループ内にキャプテンの同一世帯や拡大家族内から複数の乗組員（ハンター）がいる場合には、彼の世帯や拡大家族の取り分が他のメンバーよりも多くなる点を指摘しておきたい。また、キャプテンがボート分（1 シェアー）を余分に取りする場合にもほかのメンバーよりもキャプテン世帯の取り分が多くなる。

第 5 節では、規則に沿った分配によってクジラの肉の約 95 パーセントは、捕獲したグループ以外の捕鯨グループや村人に提供されている点を確認するとともに、強調しておきたい。すなわち、クジラを捕獲したグループが占有し、自由に利用できるクジラの肉や脂皮は全体の 5 パーセントあまりに過ぎない。

6 分配や分与について

クジラの髭を除く肉や脂皮などは、売買されることはなく、贈与や交換の対象となる。クジラの解体後の第 1 次分配や、翌日のキャプテン宅の祝宴、アブガウティ¹⁸⁾やナルカタック祭、感謝祭、クリスマス、使者祭での祝宴などを通したクジラ肉や脂皮の分配（提供）は規則に従ったものであり、それ以外の第 2 次以降の分配や分与、

交換は自主的なものである。

これまで示してきたように解体直後の分配方法は、バロー村の中でも、バロー村と他の村との間でも差異が認められる。バロー村内での通時的と共時的な変異は、キャプテンの裁量に左右されるからである。ウォールとスミスは、1986年の時点でバロー村では日常的な食物分配の頻度が低減してきている上に、善意による分与や返礼の期待をしない分与というよりも物々交換的なやり取りへと変化してきたことを指摘している (Worl and Smythe 1986: 300)。このように変化はみられるものの、規則に則ったクジラの肉や脂皮の第一次分配は実践されているし、拡大家族内での食物分配も行われている (Bodenhorn 2000)。また、各種祝宴を通してのクジラ料理の共食も特定のやり方によって実施されている。

ここでは、イヌピアットによるクジラをめぐる分配と分与について、それらの特徴および実施の理由、機能について論じたい。

6.1 クジラの分配の特徴

アラスカのイヌピアットは、彼らの「伝統」と国際捕鯨委員会が決めた「先住民生存捕鯨」の枠組の中で捕鯨を行い、その産物を分配し、消費している。分配に際しては、クジラの髭の部位以外は、金銭で売買することはなく、無償で分配されるか、他の産物と交換される。

イヌピアットのクジラの分配については、2つの特徴を指摘することができる。第1に、明確な規則に従った分配と自主的な分配の2種類が存在している。前者は解体後の第1次分配や祝宴での共食であり、分配についてはキャプテンによる多少の裁量の余地はあるものの、いかに分配すべきか、どの部位を共食に提供すべきかが明確に決まっている。一方、キャプテンやハンターによる個人的な分配や贈与、交換は彼らの意思に依存している。

この分配制度のために、捕鯨に成功したキャプテンとその乗組員（ハンター）は、彼らの捕鯨自体からは多くの肉や脂皮を入手することはできず、大半がコミュニティを対象とした祝宴や、曳航と解体を補助した他の捕鯨グループに分配されるという特徴を持つ。さらに、個人的な分配や分与、交換を通してクジラの肉や脂皮は村内外のイヌピアットの人々に流通していく。これが第2番目の特徴である。

6.2 クジラを規則に基づいて分配する理由

クジラは、解体後、規則に基づいて分配されるが、なぜ規則に基づいて分配される

かについて考えてみたい。

本研究と関連する研究にボーデンホーンのイヌピアットの食物分配研究 (Bodenhorn 2000) とデールのグリーンランド・イヌイットの食物分配研究 (Dahl 2000) がある。

ボーデンホーンは、クジラに関して分け前 (shares) と分配 (sharing) を峻別すべきであると主張している (Bodenhorn 2000: 28–29)。分け前とはある人物が特定の仕事や責務を果たした見返りにもらうものであり、分配とは分配されることが期待されているが、それぞれの人がどのくらい、だれに、どのような脈絡で分け与えるかを決めることができるという違いがある (Bodenhorn 2000: 39)。彼女は、前者は生産手段を提供することや捕獲に参加することによって得られるものである一方、分配はイヌピアットの世界観と適応に深く関わっている、と指摘している。イヌピアットは、「人々に与えれば与えるほど、その見返りとして動物は自らの命をより多く、差し出す」 (Bodenhorn 2000: 44) や「動物は分配する人のもとにやってくる」 (Bodenhorn 2000: 47) という世界観をもっているため、食物分配を実践するし、行うことが重要であると考えている。さらに、食物分配は、現代の社会経済的な脈絡において、現金で購入できないクジラの肉などカントリー・フードを入手する手段であり、現代社会への適応方法のひとつであると指摘している (Bodenhorn 2000: 48)。

グリーンランド北西部のサッカック (Saqqaq) で調査を行ったデールは、分配 (sharing) と肉の贈与 (the giving of meat gift) を区別すべきであると主張している。同村には伝統的な獲物の分配であるニゲルポック (ningerpoq)、近年制度化されたシロイルカのボートの乗組員による分配であるアグアルポック (agguarpoq)、肉の贈り物であるパユポック (pajuppoq) の3種類の分配が存在している。デールは、前2者は生産関係の一部であるのに対し、後者は社会関係ないしは社会的交換システムに属しているという。前2者は狩猟活動に参加したハンターらがシロイルカの特定の部位や肉、脂皮に対して持つ権利に由来する規則に基づいた分配であるのに対し、後者は社会道徳に基づく返礼を要求しない自主的な分配である。すなわち、生産関係に基づく規則で定まった分配と、義務的ではない自主的な分配の2種類が存在していると指摘している (Dahl 2000: 175–178)。ボーデンホーンとデールの指摘で興味深いのは、彼らは異なる記述概念を使用しているが、ボーデンホーンの「分け前」とデールの「分配」はほぼ同義である。そして地域は異なるがクジラやシロイルカの分配が規則で定められているのは、生産関係や共同生産に関係している場合である。

イヌピアットの捕鯨では、クジラの捕殺については1つの捕鯨グループでもできる

が、解体場所まで曳航し、海氷上ないしは陸上にあげ、解体し、貯蔵するという一連の作業を迅速に行うには一捕鯨グループの労働力だけではきわめて困難である。ほぼすべての捕鯨において2つ以上の捕鯨グループが捕獲後の作業に参加している。このことを考えると、分配のやり方が規則で決まっているのは、共同労働や道具の提供者に対してそれに見合った分け前を与えるためだと考えられる。さらに補足すると、この分配規則があるからこそ、捕鯨グループが獲物の大半を独占的に所有するのではなく、大半の獲物がそのほかの捕鯨グループや村人に分配されることが可能になり、かつ保障されているといえよう。このように考えると、規則は、複数の捕鯨グループが参加した捕鯨の成果を広くバロー村のイヌピアット（コミュニティ全体）に分配させるための社会的な仕掛けであるといえる。従って、筆者はコミュニティ全体の福利に貢献する仕組みを作りだすことが、分配の規則化の最大の理由であろうと考える。

6.3 クジラの分配を続ける理由と機能

キャプテンやその乗組員が、捕鯨の成功自体から多大な個人的利益を得ることがないのに、なぜ彼らは分配を続けるのだろうか¹⁹⁾。食物分配は、狩猟採集民社会の特徴のひとつであると考えられているため、その起源や存在を説明しようとする多数の研究が存在している²⁰⁾。ここで既存の仮説をすべて検証することはしないが、存続理由を解明するためには、筆者は食物分配についてイヌピアットにとっての社会的な機能や効果に着目するのが妥当であると考え。ここでは規則による分配と自主的な分配の違いにも注意を払いながら論じてみたい。

なお、現在のバロー村は、イヌピアット以外に多数のヨーロッパ系のアメリカ人や、タイや韓国、フィリピンからの労働移民が多数、居住している。しかし、クジラなどを分配する範囲は、おもにイヌピアット内に限定されている。ここでは、バロー村中のイヌピアット社会を、イヌピアット・コミュニティと呼ぶことにしたい。

第1に、クジラの規則に基づく分配は、祝宴を通して村全体にクジラ（文化的価値の高い食べ物）を提供する。キャプテンやハンターは、コミュニティ全体に食料を提供するために捕鯨をしている点を強調し、そのことを捕鯨の目的のひとつにしている。すでに指摘したように、可食部分の95パーセント弱は、クジラの曳航や解体を補助した他の捕鯨グループ（可食部分の約60パーセント）への分配やナルカタック祭などの村のイヌピアット・コミュニティ（可食部分の約35パーセント）を対象とした祝宴のために使用されることになる。捕鯨の成功は、捕獲した以外の捕鯨グループのみならず、祝宴を通してイヌピアット・コミュニティ全体にも肉や脂皮をもたら

すことになる。さらに祝宴は、文化的な価値の高いクジラを共食することによってイヌピアットとしてまた、バロー村のイヌピアットとしてのアイデンティティを確認し、維持する場となる。

第2に、規則に基づく分配や自主的な分配の継続的な実践は、世帯間や拡大家族間、捕鯨グループ間でのクジラ産物の消費量の格差を縮小させる。クジラの肉が欲しい村人は、クジラの捕獲に成功したキャプテン宅での祝宴や、アプガウティとナルカタック祭、感謝祭、クリスマスの祝宴に参加したり、捕鯨者である家族・親族や友人から鯨肉や脂皮を分与してもらうことによって、食べたり、入手したりすることができる。このためキャプテンの世帯、乗組員の世帯、捕鯨者がいない世帯の間では、鯨肉や脂皮の所有量に格差が存在しているものの、規則に基づいた分配や自主的な分配は鯨肉や脂皮の消費量を一部の個人や世帯レベルで格差を縮小させる、もしくは平準化を促進させる効果がある。

第3に、村全体での祝宴による食物の分配や各捕鯨グループ内での分配は、村人全体のレベルや捕鯨グループレベル、拡大家族レベルでアイデンティティや社会関係の再生産に関係する。自主的な分配は、鯨肉や脂皮がある特定の間人（世帯）から別の間人（世帯）へと特定の社会関係に沿って流通することによって、家族関係や親族関係、友人関係を確認し、維持させる効果がある。

第4に、自主的な分配には、寡婦や老人のような社会的な弱者や、経済的に困った人々の食料不足を助ける社会保障的な機能があり、コミュニティ全体の福祉に貢献する。すでに示したように、捕鯨グループのキャプテンやハンターは、1年の捕鯨活動を通して、1人当たり約113.6キログラムの鯨肉と、約62.5キログラムの脂皮を入手することができる。彼らの鯨肉や脂皮は各自の世帯だけで消費されるのではなく、さらに分割され、彼らの家族や親族、友人以外にも、寡婦や老人、経済的に困ったイヌピアットに自主的に分配されるのである。とくに、キャプテンやハンターは、社会的弱者にはより多くの鯨肉や脂皮が行き渡るように配慮している点を強調しておきたい。

第5に、規則に基づく分配と自主的な分配は、クジラ、神、イヌピアットの関係に関する世界観と深く関わっており、分配の実践を通して、この世界観が再生産される。ボーデンホーンは、自主的な分配の背景としてイヌピアットとクジラをはじめとする動物との特殊な関係を示す世界観について指摘しているが、筆者は規則に基づく分配もこの世界観と深く関わっていると考えている（Bodenhorn 1990; 2000; 2005）。この規則に基づく分配によって、クジラを捕獲した捕鯨グループのキャプテンやその乗組

員（ハンター）が獲物を独占するのではなく、クジラの解体や曳航を助けた他の捕鯨グループや祝宴によってコミュニティ全体が獲物を享受できるような仕組みになっている。すなわち、クジラを捕獲した捕鯨グループは、彼らの分け前は保持しつつ、大半を他の人々に提供することになる。この実践は、まさにクジラとイヌピアットの関係もしくは神とクジラとイヌピアットの関係に基づいている。

イヌピアットにとってクジラは特別な存在である。クジラには遠く離れた人間社会で起こっていることを見聞する能力があり、クジラや他人に対して正しく振舞うキャプテン（とその妻）に捕られるために自らの命を投げ出すとイヌピアットは信じている。彼らは、キャプテン夫妻、特に、キャプテンの妻にクジラは引き寄せられると考えられており、キャプテンとその妻は、クジラに対しても仲間の人間に対しても適切な行動をとる必要があると考えている。クジラがいやがることをしないこと、獲物はほかの人に分け与えることなどを続ければ、クジラは再びその夫妻の捕鯨グループに捕られるために戻ってくるという。このような世界観のもとで、彼らは自らの行いを自制しながら、クジラ猟に従事している（Bodenhorn 1990; Turner 1990; Victor 1987）。

ただし、イヌピアットとクジラの関係は、基本的には持続しながらも、キリスト教の影響を受け、変容している。現在、イヌピアットはクジラを遣わしているのはキリスト教の神であり、クジラを捕獲したことによる恵みへの感謝は、クジラではなく、キリスト教の神に向けられるようになってきている（岸上 2009b）。クジラをめぐる世界観は変容を受けつつも、捕鯨活動はイヌピアットの世界観と深く結びついたままである。従って、彼らの捕鯨活動や獲物の分配は、彼らの世界観を反映していると考えられる²¹⁾。

第6に、規則に基づく分配や自主的な分配は、捕鯨に成功した捕鯨グループのキャプテンと彼の捕鯨グループのハンターたちの名声を高める効果がある。バロー村のイヌピアットの場合には、捕鯨に成功した捕鯨グループは獲物の大半を他の捕鯨グループや村人に提供する仕組みになっている。いつも捕鯨に成功し、祝宴を開催する捕鯨グループのキャプテンと乗組員（ハンター）は、村人から「真のイヌピアット」であるとみなされ、かつ尊敬される。このため、すでに示したように金銭的な利益を得ることはできないが、彼らは捕鯨や2種類の分配を通して、社会的な名声を得ることになる。そしてキャプテンや彼の乗組員は、捕鯨の成功や獲物の分配を通して、文化的な満足感を得ることができる。キャプテンの中でもコミュニティへの貢献が大きいとみなされている人物やその妻は、郡長や郡会議員、村長、先住民団体の役員に選出される傾向が顕著に認められる。彼らは政治的な影響力を併せ持っているといえよう。

イヌピアットにとって捕鯨自体はある種、神聖な活動であるが、捕鯨とその後の分配というプロセス自体がジャワの闘鶏（ギアーツ 1987）や祇園祭や三社祭の参加者が熱狂するような、ある種お祭り気分にさせる活動であると筆者は考えている。イヌピアットの生業や賃金労働について研究したクルーズ（Kruse 1991）は、人々は賃金労働よりも生業活動に魅力を感じていると報告している。彼は、生業活動が、その結果から得られる利益以上に、社会的なやり取りや挑戦感、達成感、日常生活から離れることのできる時間であるなど「プロセスから得られる恩恵」（process benefits）をイヌピアットに与えることができる、と主張している（Kruse 1991: 324-325）。クルーズの研究は 20 年あまり前のものであるが、筆者はこの指摘は現在でもかなりの程度、当てはまるのではないかと考える。現在のイヌピアットは捕鯨や獲物の分配に参加することによって、賃金労働からは得ることのできない、文化的な達成感や満足感など生きがいを得ているように思われる。

以上、検討してきたように捕鯨とその後の獲物の分配には複数の機能や効果が認められ、これらがイヌピアットの分配が継続している理由であると考えられる。筆者は其中でも、獲物の分配がコミュニティ全体の福利（コミュニティのメンバーが文化的な満足感を得つつ、生きること）に貢献するとともに、捕鯨者に社会的な威信を付与し、彼らの文化的な満足感を生み出している点が、イヌピアットが分配を継続しているおもな理由であると考えられる。この点に関しては、今後、検証される必要があるが、仮説として提起したい。また、捕鯨や獲物の分配を行うこと自体が、彼らの生きがいや生き方の一部になっている点も強調しておきたい。

7 結語

イヌピアットのクジラの分配は、規則に基づく分配と自主的な分配の 2 種類に大別することができる。規則に基づく分配のやり方には、村間や村内で差異が認められるとともに、同一村内でも世代間でも多少の差異が認められる。同一村落内での通時的および共時的な差異は、キャプテンによる裁量によって生み出されると考えられる。捕鯨グループごとに若干の違いがみられるかもしれないが、規則に基づく分配は、協力労働に基づく成果である、文化的に価値の高い食料をコミュニティ全体にいきわたらせるための仕組みになっている。

さらに 2 種類の分配の実践には、世界観の再生産や、さまざまレベルでのアイデンティティと社会関係の再生産という効果以外に、文化的に価値の高い食料の獲得手段

やコミュニティの福祉への貢献、食料の消費量の平準化などさまざまな機能や効果がある。さらに、2種類の分配を通してキャプテンやその乗組員（ハンター）は社会的な名声を得ることができるのみならず、文化的満足感も得ることができる。筆者は、これらの機能や効果のためにバロー村のイヌピアットは2種類の分配を続けているのだと考える。

現代のイヌピアット社会における捕鯨や獲物の分配の実践は、個人的な利益の追求ではなく、彼らにとって価値のある資源をコミュニティのために追い求め、コミュニティ全体で分かち合うことであり、それ自体が目的と化している。そしてその結果は、カナダ・イヌイットの事例（岸上 2007; Wenzel 1991: 100）と同様に、コミュニティ全体の福利（well-being）に貢献していると言えよう²²⁾。

謝 辞

本論文は、平成23年度科学研究費補助金基盤研究（B）「北アメリカ先住民社会における先住民生存捕鯨と先住権」（代表者：岸上伸啓、課題番号：21401045）の研究成果の一部である。本研究のための現地調査を実施するにあたり、BASC（Barrow Arctic Science Consortium）のGlenn Sheehan博士、The Barrow Whaling Captains AssociationのEugene Browerさん、Harry Brower Jr.さん、Herman Ahsoakさん、Johnny Leavittさんら、さらにNSB政府のCraig Georgeさんらをはじめとする多数の方々から多大のご協力を得た。本論文の草稿について国立民族学博物館・外来研究員の中村真里絵さんと総合研究大学院大学・大学院生の吉村健司君からコメントを頂戴した。また、3名の査読者の方からコメントや今後の課題、誤りの指摘などを頂戴した。これらの方々に、記して感謝の意を表すものである。

注

- 1) 狩猟採集社会にはいくつかの特徴がみられるが、食物分配はそのひとつである。詳しくは岸上（2003a, 2003b）、Kelly（1995）、Lee（1999）、Wenzel, Hovelsrud-Broda, and Kishigami eds.（2000）、Widlok and Tedesse eds.（2005a, 2005b）などを参照されたい。
- 2) イヌピアットは、アラスカの北西地域の沿岸部と内陸部に住むエスキモー（イヌイット）グループのひとつである。イヌピアックやイヌピアック・エスキモーと呼ばれることもある。
- 3) Aboriginal Subsistence Whalingは、通常「原住民生存捕鯨」と訳されているが、本論文では「先住民生存捕鯨」と表記する。
- 4) 世界の先住民生存捕鯨については、浜口（2002: 23–26; 2011）や池谷（2006）、岸上（2009a）などを参照されたい。また、世界の先住民による捕鯨の現状については岩崎（2011）を、捕鯨の現状については大隅（2003）、捕鯨研究の動向については岸上（2011a）を参照されたい。
- 5) 19世紀末から20世紀初頭にかけては、アラスカ先住民にとってクジラの髭は、欧米人との重要な交易品であり、多大の経済的利潤を捕鯨キャプテンにもたらした（Bockstoce 2009; Sheehan 1997）。しかし現在では、クジラの髭や骨は金銭的に売買されることがほとんどない。

- 6) バローやカクトヴィク、ヌイックストなどの村では、捕獲しやすく、肉が柔らかく味のよい体長 10 メートル前後の小型クジラを捕獲する傾向があるが、ポイント・ホープやウェインライトでは、1 頭で大量の肉と脂皮を村にもたらす 13 メートルを超す大型クジラを好んで捕獲する傾向がある。
- 7) 捕鯨キャプテンには税制上の優遇措置があること (Bodenhorn 2005: 89) や、米国政府がアラスカ・エスキモー捕鯨委員会 (Alaska Eskimo Whaling Commission) の活動に補助金を出していることが、彼らの捕鯨の継続を可能にしているのではない。むしろ、賃金労働による現金収入や先住民団体とアラスカ政府からの配当金などが捕鯨の運営経費に使用されている (岸上 2009a; Kishigami 2010)。また、クジラの髭を地元の工芸家に販売するイヌピアットもいるが、無償で分与することの方が一般的である。なお、クジラの髭は商業捕鯨期 (1848 年～1914 年ごろ) にも欧米から来た交易者に売り渡しており、広義の伝統的な活動の一部であるとみなすことも可能である。
- 8) 温暖化や、それに伴う油田開発、輸送のための北西航路の利用、動物愛護・環境保護運動の捕鯨活動に及ぼす諸影響については、岸上 (2009a) や Kishigami (2010) を参照されたい。
- 9) シェアーとは、分け前のことである。たとえば、クジラの肉を 12 のグループで等しく分配する場合、12 分の 1 に当たる肉の分量が 1 シェアーになる。
- 10) 秋季捕鯨は村から 10 キロメートル以上離れた沖合で行なわれることが多い。このため、捕獲したクジラを解体場のある村の郊外の海岸まで複数のエンジン付きボートで曳航する必要がある。春季捕鯨の場合は、海氷縁の近くで捕獲し、近くの海氷上に引きあげて解体するので、エンジン付きボートを必要としないことが多い。
- 11) 鼓膜は象徴的な記念物であり、クジラを捕獲した記録になる。
- 12) 1 回のナルカタック祭を開催するためには、パンや果物、飲み物、紙皿、紙コップなどを準備する必要があるが、1,000 ドル以上の経費がかかる。
- 13) ブランケット・トスとは、ウミアックの乗組員や彼らの関係者が、ウミアックのアザラシ皮製船体カバーを縫い合わせて作ったシートの端を持ち、その上を 1 人ずつ高く飛びあがるトランポリンのような遊びのことである。
- 14) 現在の使者祭については、生田による研究がある (Ikuta 2007)。
- 15) 日常生活における食物分配や交換については、ボーデンホーンによる詳細な研究があるので、ここでは詳しく述べない (Bodenhorn 2000: 38-44; 2005)。
- 16) クジラの肉や脂皮を個人的に所有している人が、自主的にそれらを贈与する場合もあれば、人から乞われて贈与する場合もある。
- 17) 2003 年の統計によるとバローの総人口は、4,429 人であった。そのうちの 61.3 パーセントにあたる 2,715 人がイヌピアットである (岸上 2009a: 506-507)。ホッキョククジラがイヌピアットの食事全体の中で占める割合は、1977 年の時点で約 19 パーセントであった (Donovan 1982: 81)。詳細は不明だが、当時と比べイヌピアット人口が 2 倍近くになった 2000 年代にはその割合がさらに低下していると推定される。すなわち、筆者は、鯨肉や脂皮はイヌピアットの日常食というよりも象徴的な食べ物になりつつあると考える。ただし、多くの中高年の世帯では、クジラの肉や脂皮は少量であっても日常的に食されている。
- 18) アブガウティは 1980 年代から現在の形態をとるようになったが、実施しないキャプテンもいる。本来、アブガウティはクジラ猟を終え、ボートやキャンプ装備とともに陸に戻ってきた、疲れ切ったキャプテンとその乗組員 (ハンター) を海岸で出迎え、ミキガックなど特別な食べ物を振舞う捕鯨グループごとの小祝宴であった (岸上 2011b)。
- 19) 1848 年から 1916 年ごろまでは、イヌピアットはクジラの髭を交易者に売ることによって、利益をあげ、富を蓄積することができた。それ以前には、先住民交易のネットワークを利用して富を蓄積することができた (Bockstoce 2009; Sheehan 1997)。
- 20) 食物分配の存在理由を説明しようとする仮説については、岸上 (2003a: 725-752) や岸上 (2007: 30-51) を参照されたい。
- 21) シベリアからグリーンランドにかけての極北地域全域において、人間と動物との関係を互恵的な関係とみる思想が広がっている。フィエナップ＝リオーダンは、動物と人間の関係をめぐる世界観と生業活動 (狩猟と分配) の対応関係を因果的に説明しようとした (Fienup-Riordan 1983)。世界観によって生業活動を説明しようとする立場は、スチュアート (1991) や大村 (2011) にもみられる。世界観は、無意識のうちに人々を動機づける条件のひとつではあるが、その主な役割は、活動の成功や失敗を事後的に説明し、人々に納得させる仕組み

- として機能しているように思われる（煎本 2007; 竹川 2007）。
- 22) 分配についての分析は、別稿（岸上 2008）で示したようにより大きな生業システムという枠組の中で、かつ事例をグローバル化の脈絡の中に位置づけながら、行なう必要がある。今回の検討とその結果は、より包括的な民族誌の一部もしくは前段階にあるものと位置づけたい。

文 献

- Alvard, Michael S.
2002 Carcass Ownership and Meat Distribution by Big-Game Cooperative Hunters. *Social Dimensions in the Economic Process* 21: 99–131.
- Alvard, Michael S. and David A. Nolin
2002 Rousseau’s Whale Hunt?: Coordination among Big-Game Hunters. *Current Anthropology* 43(4): 533–559.
- Bockstoce, John R.
2009 *Furs and Frontiers in the Far North: The Contest among Native and Foreign Nations for the Bering Strait Fur Trade*. New Heaven and London: Yale University Press.
- Bodenhorn, Barbara
1990 I’m Not the Great Hunter, My Wife Is: Inupiat and Anthropological Models of Gender. *Études/Inuit/Studies* 14(1/2): 55–74.
2000 It’s Good to Know Who Your Relatives Are but We Were Taught to Share with Everybody: Share and Sharing among Inupiaq Households. In G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda, and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No. 53), pp. 27–60. Osaka: National Museum of Ethnology.
2005 Sharing Costs: An Exploration of Personal and Individual Property, Equalities and Differentiation. In Thomas Widlok and Wolde Gossa Tadesse (eds.) *Property and Equality* Vol. 1 (Ritualisation, Sharing, Egalitarianism), pp. 77–104. New York and Oxford: Berghahn Books.
- Brower Jr. Harry and Taqulik Hepa
1998 Subsistence Hunting Activities and the Inupiat Eskimo. *Cultural Survival Quarterly* 22(3): 37–39.
- Burch, Jr. Ernest S.
2006 *Social Life in Northwest Alaska: The Structure of Inupiaq Eskimo Nations*. Fairbanks: University of Alaska Press.
- Dahl, Jens
2000 *Saqqaq: An Inuit Hunting Community in the Modern World*. Toronto: University of Toronto Press.
- Donovan, G. P.
1982 The International Whaling Commission and Aboriginal/Subsistence Whaling: April 1979 to July 1981. *Reports of the International Whaling Commission* (Special Issue 4), pp. 79–86. Cambridge: International Whaling Commission.
- Fienup-Riordan, Ann
1983 *The Nelson Island Eskimo: Social Structure and Ritual Distribution*. Anchorage: Alaska Pacific University Press.
- Foote, B. A.
1992 I. Hunting, Fishing and Gathering—Methods and Equipment. *The Tigara Eskimos and Their Environment*, pp. 21–32. Point Hope, Alaska: North Slope Borough Commission on Inupiat History, Language and Culture.
- Gambell, Ray
1993 International Management of Whales and whaling: An Historical Review of the Regulation of Commercial and Aboriginal Subsistence whaling. *Arctic* 46(2): 97–107.

岸上 米国アラスカ州バロー村のイヌピアットによるホッキョククジラ肉の分配と流通について

蒲生正男

1964 「アラスカ・エスキモーにおけるバンドの構造原理」『民族学研究』28(2): 1-32。

ギアーツ, C.

1987 「第15章 デープ・プレイ・バリの闘鶏に関する覚書」吉田禎吾ほか訳『文化の解釈学 II』pp. 389-460, 東京: 岩波書店。

George, John Craig

1981 Current Procedure for Allocating the Bowhead Whale, *Balaena mysticetus*, by the Eskimo Whalers of Barrow, Alaska. In T. F. Albert (ed.) *Tissue Structural Studies and Other Investigations on the Biology of Endangered Whales in the Beaufort Sea*, pp. 789-805. Report to the Bureau of Land Management from the Department of Veterinary Science, University of Maryland, College Park, Md. 20742.

George, John Craig, Michael L. Philo, Geoffrey M. Carroll, and Thomas F. Albert

1988 1987 Subsistence Harvest of Bowhead Whales, *Balaena mysticetus*, by Alaskan Eskimo (SC/39/PS12), *Report of the International Whaling Commission* 38: 389-392.

Graburn, Nelson H. H.

1969 *Eskimos without Igloo: Social and Economic Development in Sugluk*. Boston: Little, Brown and Company.

浜口尚

2002 『捕鯨文化論入門』京都: サイテック。

2011 「モバイル時代の鯨捕り——カリブ海, ベクウェイ島の事例より」松本博之編『海洋環境保全の人類学——沿岸水域利用と国際社会』(国立民族学博物館調査報告 97) pp. 225-236, 大阪: 国立民族学博物館。

Hovelsrud-Broda, Grete

2000 “Sharing”, Transfers, Transactions and the Concept of Generalized Reciprocity. In G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda, and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No. 53), pp. 193-214. Osaka: National Museum of Ethnology.

池谷和信

2006 「シベリア北東部におけるチュクチの海獣狩猟の生態人類学」北海道立北方民族博物館編『文化の十字路——北太平洋沿岸の文化』(第20回北方民族文化シンポジウム報告書) pp. 35-41, 網走: 北方文化振興協会。

Ikuta, Hiroko

2007 Inupiat Pride: Kivgiq (Messenger Feast) on the Alaskan North Slope. *Études/Inuit/Studies* 31(1/2): 343-364.

煎本孝

2007 「北方研究の展開」煎本孝・山岸俊男編『現代文化人類学の課題——北方研究からみる』pp. 4-30, 京都: 世界思想社。

岩崎まさみ

2011 「先住民族による捕鯨活動」松本博之編『海洋環境保全の人類学——沿岸水域利用と国際社会』(国立民族学博物館調査報告 97) pp. 197-224, 大阪: 国立民族学博物館。

Kelly, R. L.

1995 *The Foraging Spectrum: Diversity in Hunter-Gatherer Lifeways*. Washington, D.C. and London: Smithsonian Institution Press.

岸上伸啓

1998 『極北の民 カナダ・イヌイット』東京: 弘文堂。

2003a 「狩猟採集民社会における食物分配——諸研究の紹介と批判的検討」『国立民族学博物館研究報告』27(4): 725-752。

2003b 「狩猟採集民社会における食物分配の類型について——「移譲」, 「交換」, 「再・分配」」『民族学研究』68(2): 145-164。

2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』京都: 世界思想社。

2008 「文化人類学的生業論——極北地域の先住民による狩猟漁撈採集活動を中心に」『国立民族学博物館研究報告』32(4): 529-578。

2009a 「文化の安全保障の視点から見た先住民生存捕鯨に関する予備的考察——アメリカ合衆国アラスカ北西地域の事例から」『国立民族学博物館研究報告』33(4): 493-550。

- 2009b 「[フォーラム] ひとと動物をめぐる地理学・地域研究の現在 アラスカ先住民イヌピアックとホッキョククジラの関係の歴史的变化」『人文地理』61(5): 436-439。
- 2011a 「捕鯨に関する文化人類学的研究における最近の動向について」『国立民族学博物館研究報告』35(3): 399-470。
- 2011b 「米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの祝宴アプガウティについて」『人文論究』80: 97-110。
- Kishigami, Nobuhiro
- 2000 Contemporary Inuit Food Sharing and Hunter Support Program of Nunavik, Canada. In G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda, and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No. 53), pp. 171-192. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2004 A New Typology of Food-sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.
- 2010 Climate Change, Oil and Gas Development, and Inupiat Whaling in Northwest Alaska. *Études/Inuit/Studies* 34(1): 91-107.
- Kruse, J. A.
- 1991 Alaska Inupiat Subsistence and Wage Employment Patterns: Understanding Individual Choice. *Human Organization* 50(4): 317-326.
- Lee, Richard
- 1999 Hunter-Gatherer Studies and the Millennium: A Look Forward (And Back). *The Bulletin of the National Museum of Ethnology* 23(4): 821-845.
- North Slope Borough School District
- 2002 Whale Distribution in Barrow, Wainwright, Kaktovik and Nuiqsut. *Agviqsiuḡnikun, Whaling Standards, Barrow and Wainwright*. Barrow, Alaska: North Slope Borough School District.
- 大村敬一
- 2011 「二重に生きる——カナダ・イヌイト社会の生業と生産の社会的布置」松井健・名和克郎・野林厚志編『グローバルゼーションと〈生きる世界〉——生業からみた人類学的現在』pp. 65-96, 東京: 東京大学東洋文化研究所。
- 大隅清治
- 2003 『クジラと日本人』東京: 岩波書店 (岩波新書)。
- Rainey, F.
- 1947 The Whale Hunters of Tigara. *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History* 41(2).
- Sheehan, Glenn
- 1997 *In the Belly of the Whale: Trade and War in Eskimo Society*. Anchorage: Alaska Anthropological Association.
- スチュアート ヘンリ
- 1991 「食料分配における男女の役割分担について——ネツリック・イヌイト社会における獲物・分配・世界観」『社会人類学年報』17: 115-127。
- Suydam, R. et al.
- 2006 Subsistence Harvest of Bowhead Whales (*Balaena mysticetus*) by Alaskan Eskimos during 2005. Barrow: Alaska Whaling Commission.
- 2007 Subsistence Harvest of Bowhead Whales (*Balaena mysticetus*) by Alaskan Eskimos during 2006. Barrow: Alaska Whaling Commission.
- 2008 Subsistence Harvest of Bowhead Whales (*Balaena mysticetus*) by Alaskan Eskimos during 2007. Barrow: Alaska Whaling Commission.
- 2009 Subsistence Harvest of Bowhead Whales (*Balaena mysticetus*) by Alaskan Eskimos during 2008. Barrow: Alaska Whaling Commission.
- 2010 Subsistence Harvest of Bowhead Whales (*Balaena mysticetus*) by Alaskan Eskimos during 2009. Barrow: Alaska Whaling Commission.
- 2011 Subsistence Harvest of Bowhead Whales (*Balaena mysticetus*) by Alaskan Eskimos during 2010. Barrow: Alaska Whaling Commission.
- 竹川大介
- 2007 「伝統社会における資源の生産・管理・贈与・交換とその説明不可能性について——

岸上 米国アラスカ州バロー村のイヌピアットによるホッキョククジラ肉の分配と流通について

ヴァヌアツ共和国ツナ島での禁忌をめぐる考察」岸上伸啓編『先住民による海洋資源の流通と管理』（平成15年度～平成18年度科学研究費補助金基盤研究（A））研究成果報告書・課題番号15251012）pp. 301-328。

Turner, Edith

1990 The Whale Decides: Eskimos' and Ethnographer's Shared Consciousness on the Ice. *Études/Inuit/Studies* 14(1/2): 39-52.

VanStone, James W.

1962 *Point Hope: An Eskimo Village in Transition*. Seattle: University of Washington Press.

Victor, Anne-Marie

1987 Éléments Symboliques de la Chasse à la Baleine. *Études/Inuit/Studies* 11(2): 139-163.

Wenzel, George

1991 *Animal Rights, Human Rights: Ecology, Economy and Ideology in the Canadian Arctic*. Toronto: University of Toronto Press.

2000 Sharing, Money, and Modern Inuit Subsistence: Obligation and Reciprocity at Clyde River, Nunavut. In G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda, and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No. 53), pp. 171-192. Osaka: National Museum of Ethnology.

Wenzel, G., G. Hovelsrud-Broda, and N. Kishigami (eds.)

2000 *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No. 53). Osaka: National Museum of Ethnology.

Widlok, Thomas and Wolde G. Tadesse (eds.)

2005a *Ritualisation, Sharing, Egalitarianism* (Property and Equality Vol. 1). New York and Oxford: Berghahn Books.

2005b *Encapsulation, Commercialisation, Discrimination* (Property and Equality Vol. 2). New York and Oxford: Berghahn Books.

Worl, Rosita

1980 The North Slope Inupiat Whaling Complex. In Y. Kotani and W. B. Workman (eds.) *Alaska Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies No. 4), pp. 305-320. Osaka: National Museum of Ethnology.

Worl, Rosita and Charles W. Smythe

1986 Barrow: A Decade of Modernization. The Barrow Case Study. Prepared for Minerals Management Service, Alaska OCS Region, Alaska OCS Socioeconomic Studies Program. U.S. Department of the Interior Technical Report No. 125.